

夢の かなえかたを 大人に聞いてみました



嫌いな人を見返すために とにかく一番を目指した

みんな将来の夢はありますか？
その夢はどうやってた
かなうのでしょうか？
夢のかなえかたを
大人に聞いてみました。



1949年福井県生まれ。大阪
大学大学院教授。博士(医
学)。伝統工芸品からメガネ、
コンピュータ、ロボット、原
子力エネルギー、人工臓器、
海事システム戦略など、幅広く
デザイン活動を行う。グッド
デザイン賞審査委員長も
歴任。「世界が尊敬する日本
人100人」に2度選ばれる。

私は一人っ子で、やんちゃな子ども
でした。幼稚園には毎日楽しく通って
いたのですが、突然母親に「もう行か
なくていいよ」と言われ、別の幼稚園に
通わされました。後で聞かされたので
すが、私がいかに乱暴すぎるので、幼
稚園から断られたらしいのです。そこ
で、次はしつけの厳しい幼稚園に通わ
されました。先生が叩くような所で、私
が「嫌な先生がいるから、行きたくな
い！」と言うと、「じゃあ、その先生をやっ
つけてきなさい」と母親に言われまし
た。「工作したり、絵を描いたり、みん
なで一緒にやるならいつも一番になら
ばいい。そうすれば、嫌な先生をやっつ
けているようなものだから」。その言葉が、
私の生き方に大きく影響を与えました。
小学生になると、田舎の学校に転校し
ました。服装から生活まで、すべてがあ
か抜けていなくてこんな所は嫌だと思
いました。そこで、先ほどの言葉を思い出
し、「勉強でもスポーツでも一番になっ
て、都会から来たヤツはすこいとかわ
てやるう」とがんばりました。その分、
試験で悪い点を取ったときの悔しがり方
もすこくて、負けたくないヤツに負け
ると、答案用紙を持って帰る布団をかぶ

て泣くほど、とにかく負けず嫌いでした。
勉強だけでなく、ケンカも相当やりま
した。一対一では負けませんが、さす
相手の兄弟が2、3人出てくると、さす
がにボコボコにされました。泣いて帰
ると父親に怒られるので、顔を洗って
帰宅しましたが、やはり気持ちが悪
い。そこで、仕返しのために木刀を
持って夕食時に相手の家へ乗り込もう
とする。「何で木刀を持って行くの」と母
親が言うので、「仕返しに行く」と言
うと、「そう。でも木刀はダメ」と、竹刀
を渡すような母親でした(笑)。相手の
家の夕食をめちゃくちゃにして帰って
くると、さすがに向こうの親も怒鳴り込
んでくる。普段はとも無口な母親でし
たが、そんなときはすごく冷静でした。「こ
ちらは一人なのに単独です。ケンカをす
るなら、一対一でやらせてください。壊
したものは弁償します」。それを聞いた
相手の親も、自分の子どもたちを引っか
り叱っていました。当時の日本人には
そんな道理があったし、何より母親の存在
は大きかったですね。

夢の小説家だったが 苦肉の策で医学部へ

読書は、子どもの頃から好きでした。
今思えば父や祖父の策略だったのかもし
れませんが(笑)、私の家には、「日本

「自分のわがままを、周りの人への
思いやり」に変えていきたい

川崎和男氏(デザインディレクター、大阪大学大学院教授、博士(医学))



夢をかなえるために大事なこと3つ!

1 わがママを
通すため、相手を
説得し、理解し、
支えてもらう!

2 嫌いな人や
嫌いなことにこそ、
ナンバー1になる!

3 いっしょうの親友と
一生の親友と
恩師を
みつける!



1998年頃から取り組んでいる「人工心臓」のモデル。さまざまな形態のものを提案し、医療分野の開発に革新を与えてきた。



1984年に発表した「タケフナイフシリーズ」。使いやすさとデザイン性を両立させ、海外でも知られている作品。



中学生～高校生の頃の1枚。「本をたくさん読んで小説家に憧れていた時期。もちろん外で遊ぶのも大好きでした」(川崎氏)。

文学全集」と「世界文学全集」が全巻そろっていました。「読んだところに印をつけておきなさい。お小遣いをあげるから」と父親が言うので、小学生で「日本文学全集」を、中学生で「世界文学全集」を読破しました。そのうち小説家に憧れました。当時は、小説は作り話を書けばよいと思っていました。これ以上ラクな職業はないと思っていました。大学進学のと看まで、真剣に小説家になりたいと思っていましたね。ところが、父親は「東京大学と防衛大学以外は認めない」と言うのです。その言葉には本当にびびりしてしまいました。苦肉の策として考えたのが、「小説家は医者が多い」ということ。やっとなんか医学部を目指す理由を見つけたのです。

その後、猛勉強しましたが、不合格。大阪で浪人生活を始めたところ、そこでグラフィックデザイナー・横尾忠則の絵と、デザイナーという言葉に出会ってしまったのです。その影響は大きく、結局、金沢美術工芸大学に入学。父親は納得していませんでしたが、母親は「赤い血を見るよりも、赤い絵の具を見て過しなさい」と言ってくれました。

エリートコースから 車椅子の生活へ

美術大学を卒業後、東京に入社しました

自分でデザインし、産地を再活性化させようと思っていました。中でも、武生という地域のナイフとの出会いが、「インダストリアルデザイナー川崎和男」を確立したのです。

夢物語を現実にするのが デザイナーという仕事

これまで、劇的に変わる環境を乗り切れたのはなぜか。それは「楽観できる力」だと思っています。父親が車椅子になったときに言いました。「故郷へ戻ってこい。俺が生きているうちは、おまえの面倒をみる」。もちろん、そんなことを言われたら、頼りませんよ。でも、そういう人がいてくれるのが何よりも心強いじゃないですか。そうして、自分自身もデザイナー。していったのです。

デザイナーとは、わがママを押し通せる職業だと思います。まずは自分のために考える。でも、それだけでは製品になりません。家族や友達や企業のために、ひいては世の中のためにならなければいけない。大切なのは「思いやり」です。自分のわがママを、思いやりで包み込む。相手を説得して、理解し支援してもらって、はじめて製品になるのです。

私は現在、人工心臓を作っています。自分自身も心臓に障害があるので、これを実現することで、多くの人たちが救わ

た。東芝といえば、工業デザインの歴史をつくったとも言える会社。オーディオ機器のデザインからスタートし、音楽のソフトやレコード企画、オーディオフェアの製作監督、広報広告への提案など、いろいろなお仕事をさせてもらいました。インダストリアル(工業)デザイナーこそ、自分にとって、使命、なのかなと思いはじめた頃、交通事故に遭い、車椅子の生活になってしまいました。本当に、どん底に落とされましたね。とりあえずデザイナーはやっていけないだろうと思って、ペンささえて持てない状態。かといって、故郷に帰るのは負けたようで嫌だ。そこで、会社を辞めて東京で自分の事務所を持ちました。車椅子の自分を忘れるためにも、ひたすら仕事に打ち込み、ヒット商品も多く出しました。しかし、だんだんと疑問がわいてきたんです。「自分が作っているものは本当に美しいデザインなのか」と。このデザインで世の中は変わるのか」と。自問自答をした結果、一度故郷へ帰る決心をしました。

しかし、故郷には自分がやりたいデザインの仕事はありません。精神的にも金銭的にも苦しい日々が続きました。そんな中で気づいたのが、「東京にあつて故郷にないもの」ばかりを探していたということ。「故郷にしかないもの」を見つければいいと、頭を切り換えたのです。そこで、地元の木工や漆、和紙、刃物を

れると信じているからです。動力は超小型の原子力バッテリー。このバッテリーさえ実用化されれば、世の中が大きく変わります。家庭用バッテリーや自動車に使えばエネルギー問題に、原子力の重粒子をガン細胞にぶつけばガン治療にも大きく貢献するはずなんです。

私は、フィクション(架空)をノンフィクション(現実)にするのがデザインという仕事だと考えます。「いのち」も「ち」(知、智、血、値)が通った仕事が出てきているのは、両親への最大の恩返しだと思っています。



子育てサ
ン
シ
ン
ト
親に
感謝して
いること

一人っ子だったこともあり、母親に褒められて育ちました。「勉強しなさい」と一度も言われたことはありません。学校を「休みたい」と言えば、「はい」と休ませる。次の日には「行かないでしょ? 電話しておいた」と言われる。3日目もなると、さすがにこちらも不安になってくるんですよ(笑)。「学校に行きたくないならば、ずっと行かなければいい」。そんな母親でした。金沢美術工芸大学に進学したときは、周囲が呆れ顔の中、「美しいモノを作る仕事はいいね」と言ってくれたのが、今でも忘れられませんね。

